プルシアンブルー

札幌市医師会
明園内科小児科医院　秦泉寺　亮

日曜午後の、とある病棟勤務室。温度板に、入院患者の体温と脈拍を記載しているA看護師の細くて綺麗な指には、トンボ社製の赤青二色鉛筆が握られている。

そして傍らのラジオからは、玉置浩二率いる安全地帯の曲“プルシアンブルーの肖像”が微かに流れていた。

そこに入室してきたのは、長身スリムなB医師、そしてA看護師との会話が始まる。

B医師　「この曲は安全地帯の新曲“プルシアンブルーの肖像”でしょ？」
A看護師「そうですよ、私の好きな歌です」
B医師　「いい曲だよね。でも安全地帯の曲なら、私は“恋の予感”の方が好きかな？」
A看護師「確かに“恋の予感”もいいですね」
B医師　「ところでAさん、プルシアンブルーってどんな色なのか知っているよね？」
A看護師「うーん？　青系の色でしょうけど、詳しくは知りません。どんな色ですか？」
B医師　「本当に知らない？　Aさんの、今一番身近にある色だけどね」
A看護師「えっ？」
B医師　「分からないかな？　それじゃあ温度板だけど、赤色で脈拍を、青色で体温を、折れ線グラフにして記載しているよね。その赤青二色鉛筆で」
A看護師「そうですよ、それが何か？」
B医師　「Aさんが今握っている二色鉛筆の赤い部分を見て！　英字が書いてあるはずだけど、どう？」
A看護師「はい、書いてありますよ。ヴァーミリオン？」
B医師　「そう、朱色ってことだよね。で、青い部分には何て書いてある？」
A看護師「あっ！」

にっこり微笑んで病棟勤務室を立ち去るスリムで美人のB医師、彼女の白衣の内には、紺青色（プルシアンブルー）のスカートが見え隠れしていた。

一人残ったA看護師、男にしては美しいその指先で触れているのは、赤青二色鉛筆の青色部分。そこにはPRUSSIAN BLUEと記されていた。

一年後、まるで恋の予感に導かれたかのように、この男性看護師と女性医師は結婚式を挙げた。プルシアンブルーに輝く湖の畔の教会で！

あれから四半世紀以上経ているが、毎年の年賀状から、今でも仲睦まじい二人の様子が見て取れる。この原稿が北海道医報新年号に掲載される頃には、既に届いているであろう彼らからの新年の便りを、今から心待ちにしている。

あなたは海派、それとも山派

函館市医師会
西堀病院　小　芝　章　剛

和歌山県の海沿いの町で生まれ、従弟を現役の漁師に持つ私は海が大好きである。

とにかく船に乗りたくて、１級船舶の免許を取ったのが７年前。ヨットの体験乗船の新聞広告を見た妻が「行ってみたら」と言ったのが５年前の夏。当日は風が強く小雨交じりで、函館湾内をほんの１時間弱だったでしょうか。ヨットに乗るのはその時が初めてでした。

その後、クラブハウスで開かれた懇親会で隣に座ったベテラン船長の新井（仮称）さんが、

「中古だけどヨット買いませんか？」

『え！　ヨット？　そんな高い買い物、いきなり言われても』

「いくらぐらいするもんなんですか」と尋ねると新井さん、片手をサッと広げる仕草。

『……？』

ヨットは車より高価であると誰しもが思うことであって、その時は私もその一人であったわけで、その５本の指の１本は一体いくらを意味するものなのか。安く言って初対面で嘲笑を買うのもシャクだし、あまり高く言ってその値で売りつけられても困るし。ハッキリ言って全く見当が付かない。中古だがまだまだしっかり走れる。ビギナーにはうってつけの物件。大きさは25フィート、６人乗り。

『え！　そんなに大きいヨット。じゃー、指１本100万？』

「先生にはそう高くない買い物だと思いますよ」

「そんなことないですよ」と、顔の前で空いている方の手を何となく横に振る。

『ん？　何だか昼間のビールが効いてきて少々気持ちが大きくなっている。まずい！　このままだと買わされそう、いや、買っちゃいそう』

クラブハウスでは、海の男たちが誰とはなしに気

さくに話しかけてくる。職業もまちまち。気が置けない仲間たちが、昼間っからヨットの話を肴に酒を酌み交わしている。あちらこちらから聞こえてくる大きな笑い声。みんなの日焼けした顔に白い歯が眩しい。

『この雰囲気、いいな、いいな。自分もこの中にどっぷり浸かりたいな～。でも、ヨット、高そうだな～？　……まっ、いっか。今日のところは諦めよ。大体クラブの雰囲気もつかめたし、そろそろこの辺でおいとましよう』

「そしたら新井さん、この辺で失礼します」

「え～！　まだいいじゃないですか。もう少し飲みましょうよ。今日は仕事ないんでしょ？」

『確かに、その通り。…ん、まずい！　簡単に乗せられてる。でも、何だな。このまま値段を聞かずに帰って、みすみす買うチャンスを逃してもな～』

ビールの妖精が、右か左か道に迷ってる私を『買い』の方向へと導き始める。

「でも、ヨットって中古でも高いんじゃないんですか？」

「自分は今別のヨットに乗ってて、2艇も緑の島に置いてても繋留費用が余計に掛かるだけだから」

『そうだった、繋留の費用だ。年間何十万だとか何百万だとかよく聞くよな』

「何かと費用が掛かって大変ですね。ちなみに、繋留の費用ってどのくらい掛かるんですか？」

「フィート3,000円（当時）」

『ということは、25フィートだと7万5千円。年間だと90万。やっぱりそのくらいするんじゃないの。だからさ、ヨット持つなんて無理なんだよ』

自分に言い聞かす。

「じゃー、今乗ってる新井さんのヨット30フィートだから、繋留費だけで100万以上も掛かるんですね～。何かすごいですね～」

「せんせ！　何言ってんの？」

『新井さん、もしかして酔ってる？』

「フィート3,000円って、年間の話だよ」

『ん、年間…？』

「それじゃー、年間7万5千円で済むんですか？」

「そうだよ！　どう、ヨット買わない？」

「その今乗ってないヨットって500万するんですよね？」

「せんせ！　何言ってんの？　5万だよ、5万」

新井さん、うつろな目で再び片手を広げた。

白昼夢のような出来事があった後、あのヨットからさらに中古艇を1艇経て、昨年のゴールデンウィーク、今のヨットを横浜から函館まで1週間かけて廻航。9月の遅い夏休みには3泊4日で奥尻まで行ってきた。週末、クルーが集まると海に出ていく。携帯が鳴っても指示は出せるが、患者さんには大変申し訳ないがすぐに駆け付けるわけにはいかない。何も考えずに、波の音を聞きながら海に漂っているだけで何よりのストレス解消になる。そして、大自然の中に身を置くことの大きな喜びとわずかな不安感が、眠りかけていた冒険心を揺り起こし、いい歳をしたおじさんがひととき少年に還る。これ以上のアンチエイジングの特効薬が今の世の中に在るだろうか。

人はそれなりの年になって自由な時間があると、海か山のどちらかへ行くようになると誰かが言っていた。もちろん私は海派だが、あなたは海派ですか、それとも山派ですか。